http://alce.jp/journal/ 第22巻（2024）pp. 190 - 210 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

論文

複数言語話者が抱える「ホンモノ幻想」

当事者の語りからの考察

金 志唯（神谷 志織）*
（広島大学大学院人間社会科学研究科）

丸田 健太郎
（広島大学附属小学校）

概要

本研究は，モノリンガリズム（単一言語主義）が浸透する日本社会において，複言語・複文化主義に則った言語観は形成可能なのか，検討したものである。複言語・複文化環境で育った筆者らの相互インタビューによって語られたナラティブの分析・考察から，モノリンガリズムが支配する日本社会において複数言語話者として生きることの困難さを明らかにした。筆者らは自身の言語について，自分はその言語の「ホンモノ」の話者ではないという「ホンモノ幻想」を抱いていることがわかった。その背景にあるのは，言語の技術的側面に対する評価を受けること，そして言語の属性に対する社会からのまなざしを受けることの二点であった。こうした「ホンモノ幻想」は，複数言語話者である筆者らを〈見えないマイノリティ〉にしてしまうものであり，「ホンモノ幻想」を乗り越えるための言語教育実践や学習者像の捉え直しが求められることが本研究から明らかとなった。

キーワード：〈見えないマイノリティ〉，複言語・複文化主義，社会通念，言語技術，言語教育

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

1. 問題の所在

現在，複言語・複文化主義に立脚する言語観が広まりつつある。複言語・複文化主義は，2001年に刊行された『ヨーロッパ言語共通参照枠』によって広く知られるようになった言語観であり，日本語教育などの言語教育分野にも大きな影響を与えた。複言語能力（plurilingual competence）や複文化能力（pluricultural competence）について，『ヨーロッパ言語共通参照枠』では以下のように定義されている。

> コミュニケーションのために複数の言語を用いて異文化間の交流に参加できる能力のことをいい，一人一人が社会的存在として複数の言語に，全て同じようにとは言わないまでも，習熟し，複数の文化での経験を有する状態のことをいう。（欧州評議会，2001/2004，p. 182）

このような従来からの言語観・言語能力観の転換に伴い，言語教育の在り方も大きく変化することになった。言語技術の習得からコミュニケーション中心の言語学習への転換によって，言語とコミュニ

* Eメール：jyskmy12@gmail.com

ケーション，さらには言語を用いた社会・他者との関わりやその基盤となるアイデンティティと言語の関係性について研究が重ねられてきた。複言語・複文化主義がもたらす示唆について，吉村（2022, p. 51）は以下のように述べている。

> 個人の言語的・文化的アイデンティティを考える際，たとえば日本人なら誰もが「国語」と「日本文化」をアイデンティティとするというような本質主義的な理解を克服し，動的かつディアスポラ的な見方が可能となるだろう。

しかし，このような言語観や概念を日本社会にそのまま持ち込むには課題もある。これは，日本社会における言語状況が欧州諸国とは異なっている面が数多く存在するためである。複言語・複文化主義を日本社会の文脈に取り入れる際の障壁になるのが，日本社会のモノリンガリズム（単一言語主義）の存在である。

小熊（1995）やイ（1996）が示しているように，日本社会においては言語の多様性が等閑視され，「日本語（国語）話者＝日本人」であるという意識が根強い。また，このようなモノリンガリズムは，日本という国家と言語，民族の関係性をより強固なものにしているといえる。

牲川（2012, p. 10）は，国家の成立と言語の関係性について，「一言語の統一性をよりどころに一国民国家の統一性・独自性・集団性があるとする信仰」のことを「言語ナショナリズム」と呼んでおり，モノリンガリズムに基づく「言語ナショナリズム」が，「国民国家の信仰」の成立に関与していることを指摘している。

筆者らは，このような背景をもつ日本社会において，変わらずモノリンガリズムが存在することによって，複数言語話者のアイデンティティの多面性が無視されてしまうという課題が生じると考えた。つまり，日本語を含む複数言語を話す人々の多様性が無視され，日本語話者としての側面が社会的に重視されることにより，他言語話者としての側面は等しく担保されないということである。これは，先の吉村（2022）で指摘された複言語・複文化主義が掲げる状況から乖離するものであり，複数言語話者のアイデンティティ形成にも大きな負の影響を与えると推測することができる。

また，このようなアイデンティティ形成の課題があることによって，社会や他者との関わりにも課題が生じる。アイデンティティの表出という自己実現を社会のなかで達成できなければ，自己の全てもしくは一部を他者に隠しながら関わらなければならないからである。このような場合，自己と社会・他者との間に健全なコミュニケーションが実現しているとは言い難い。このようなコミュニケーションに関する問題は，多様性を認める社会の実現に向けて，解決すべき課題である。

そして，日本社会においては，家庭内での言語と社会における言語の間に溝が生まれ，個人が複数の言語を用いるという複言語・複文化主義の理念から外れてしまう状況があり，言語的・文化的多様性の担保やアイデンティティ形成の課題からも問い直されるべき問題であると考える。

以上を踏まえ，本研究では日本における複数言語話者が日本社会でどのように受け止められ，どのようなアイデンティティ形成の課題を抱えているのかを浮き彫りにする。これにより，日本社会における複言語・複文化主義の導入や言語観の転換に寄与することができると筆者らは考える。

2. 研究の目的と方法

ここでは，モノリンガリズムが支配する日本において，複言語・複文化環境で生きてきた経験を持つ筆者らを取り上げる。

金は両親が韓国人のニューカマー2世であり，日本で育った経験をもつ。家庭言語が日本語であった

ことから，韓国語に対して苦手意識があり，韓国人としての自分と韓国語を話せない自分の狭間で葛藤を抱えてきた。また，丸田は，姉弟がろう者のSODA（Siblings of Deaf Adults/Children）であり，聴者として音声日本語で生活をしながら，生まれながらにして手話言語やろう文化に触れてきたという経験をもつ。

本論文では，モノリンガリズムが支配する日本において複数言語話者として生きていくことの困難を，似た経験を共有する当事者同士が聞きあうことを通して明らかにしていくことを目的とする。近年，当事者研究として当事者の経験や語りを対象とする研究も数多く報告されてきた。熊谷（2020, p. 66）は「当事者研究は，自分固有の経験を素材にして，そこから知識を生み出すことにその特徴があるが，それは言い換えると，自己の物語を構築する営みであるとみなせる」と述べている。当事者の立場を有する筆者らの経験を媒介にすることによって，筆者らの自己物語の再構築や新たな知の創造がもたらされると考える。

また，当事者同士が相互インタビューを行うことで，その経験の語りがより鮮明に引き出されると考えられる。熊谷（2020, p. 74）は似た経験を有する当事者同士の語り合いがもたらす作用について，「一人きりのエピソード記憶は十分な現実対応性をもたないが，類似した意識経験をもつ他者との，言語を介した，経験と確信度のコミュニケーションを通じて，双方の意識内容の現実対応性は高まっていく」と述べる。さらに，「当事者研究によって圧倒的に，そして確実に認知が変わるのは，「話す側」ではなくむしろ「聞く側」のほう」（熊谷，國分，2017, p. 20）であることから，当事者同士が互いに経験を語り，聞き合う相互インタビューの形式をとることによって，互いの語りから経験や自己そのものを内省し，相手の語りの影響を受けて自己を更新する新たな語りを引き出すことが可能になると考えられる。さらに，熊谷が指摘するように，経験を個の中に閉じ込めるのではなく，社会へ還元していく可能性を探ることができると考える。

このような似た経験をもつ筆者らが語り合うことは，ナラティブを媒介に相互の経験を解釈し，共有するとともにそれぞれの立場による個別性を相対化する対話実践であるといえる。この対話実践を達成し，記述するための方法として，ナラティブ・インクワイアリー（Narrative Inquiry：以下，NI）を採用した。

二宮（2010, p. 39）はNIに参加する人々の立場や関係性について，以下のように述べている。

> NIでは，その対象として，現場の人々における経験を構成するナラティヴへの探究に注目し，それを研究者との相互作用のなかで動態的かつ関係論的にとらえようとする。それまで実践者／研究者として異なる立場にたつものとされてきた人々は，共に「ナラティヴを探究する存在」と位置づけられる。

本研究では，金と丸田が互いの研究を語り合うことで，相互の経験を呼び起こし，その共通性と個別性から新たな知を創造することを目指した。それぞれのライフストーリーが表れている記述をもとに対話実践を行うことで，相手の経験や語りを媒介にしながら，当事者研究として自身の認知を更新することができると考える。

また，中井（2015, p. 19）はNIの参加者の立場について「NIでは研究協力者だけではなく研究者自身も研究対象となり，両者の相互作用によって語りが構成されていくと見なされる」と述べる。本研究においては，金も丸田もそれぞれ独立した研究者であるという属性を反映し，対話実践に参加する者として対等な立場をとっている。語り手と聞き手や調査者と被調査者という関係ではなく，「互いの経験から共同で新たな知を創造する研究者」という対等な立場をとることで，自身らの経験を探究することができる。

表1. インタビュー調査の実施概要

回数	日時	時間	内容	方法
1回目	2023年1月13日	92分	経験の語りと言語観	オンライン
2回目	2023年1月20日	56分	フォローアップと教育観	オンライン
3回目	2023年5月4日	32分	フォローアップと自身の実践	対面
4回目	2024年5月25日	139分	フォローアップ	対面

このように相互行為によって構築された筆者らの語りは，筆者らが複数言語話者として生きたという社会的文脈を共有していることを前提として紡がれたものである。つまり，似た経験を共有する当事者同士の語りを対象とした本研究は，経験を個人に内在されるものとして閉鎖的に捉えるだけではなく，社会的文脈の中にも位置づけられるものとして，当事者の語りを社会に還元することの可能性を提示するものであるといえる。

本研究では，まず，筆者らのライフストーリーが表れている記述を互いに読み，それらをもとに相互インタビューを行った。この相互インタビューの過程では，相手の経験を対象化し，自身の経験の解釈の深化を図った。対話のなかでさらにそれぞれのライフストーリーを再構築し，その共通性と個別性を視点として，実践のなかで構築された語りについて分析を行った。

3. 相互インタビューにおける語りとその分析

3. 1. インタビュー調査の概要

筆者らは大学院で同じ研究室に所属する先輩・後輩の関係であり，2018年に知り合って以来，互いの研究やその根底にある経験・言語観について話をする機会があった。そのなかで，それぞれ複数の言語・文化・社会の狭間で生きてきたという経験に共通するものがあるのではないかと考えるようになった。そうした経験やそこから生じる言語観・教育観の相違について探索したいと考え，本インタビュー調査が行われる運びとなった。

インタビュー調査の実施にあたり，改めて互いの経験について知るために，後述するライフストーリーが表れた記述をそれぞれ共有した上で，筆者らは複言語環境で生きてきたという経験と言語観に関して，互いに対話のなかで探索を行った。インタビュー調査は表1の通り，計4回行われた。

次項からは実際の対話のトランスクリプト（以下TS）を示しながら，筆者らの経験と言語観について分析を行う。なお，TSの編集段階において，笑いを含む発話には「（笑）」を，また，括弧書きで補足事項を付記したほか，読みやすさを担保するために人の発話・内言を指すせりふにはかぎ括弧を付した。

3. 2. それぞれのライフストーリー

インタビュー調査の実施にあたり，筆者らは互いのライフストーリーが記述されたそれぞれの修士論文や学術論文を読み合うことを行った。インタビュー調査ではこうしたライフストーリーを念頭に，それらをさらに探索する形で対話が行われた。本項では，筆者らのこれまでの記述からみえる言語に関する経験についてそれぞれまとめる。

3. 2. 1. 金の経験

金は韓国人の両親をもちながら幼少期より日本で育ち，日本語と韓国語の両言語に接してきたことで複言語環境を生きたという経験を有している。

金は自身の母語を日本語だと捉えており，自身の

韓国語については自信をもつことができていない。以下は，金の修士論文における記述の一部である（神谷，2021，p. 12）。

> 両親（特に父）がよく祖父母と国際通話しており，通話の最後に子どもたちに祖父母と話すよう促すことがよくあった。小学校入学後，幼稚園の頃よりも韓国語を忘れていた私は，言いたいことが韓国語で言えなかったり発音が悪く祖父母に通じないことが度々あった。（中略）私が韓国語を話すと「何を言っているのか分からない」と祖父母ががっかりすることもあり，私はだんだん通話をしたがらなくなった。そこで韓国語が苦手だからと，韓国語の勉強をしようとすることは特になく，韓国語の使用場面を避けるばかりであった。

上記のような記述からもわかるように，金は他者，特に祖父母や両親といった重要な他者からの評価を受けることで自身の韓国語に自信を失い，韓国語の使用場面そのものを避けるようになっていく。

一方で，下記のような記述も見られる（神谷，2021，p. 16）。

> きちんと韓国語を話せるようになって祖父母と会話できればという思いもあり，大学に進学し親元を離れた頃から少しずつ勉強をするようになった。大学4年生の頃には2週間の韓国への短期留学も行い，留学を機に自身の韓国語が思っていたよりもできる方であること，現地の人を相手に通じることを知ったほか，自分がこれまで両親のような「完璧なネイティブスピーカー」を目指し過ぎたのだと気付き，ある程度通じれば上出来だと考えられるようになってきた。韓国語能力試験を受験するなどして少しずつ勉強し自信も以前よりはついたものの，未だ両親を相手に韓国語で話すことはできていない。

上記の記述のように，韓国での経験から自身の韓国語話者としての理想を改め，「ある程度通じれば上出来だ」という言語観をもつに至っている。

しかしながら，韓国語への苦手意識が緩和されたにもかかわらず，両親に対して韓国語で話すことはできておらず，幼少期より形成された両親とのコミュニケーションにおける韓国語への抵抗感は未だ解消されていないことがわかる。

3．2．2．丸田の経験

丸田は，姉弟がろう者のSODAである。家庭の外では音声日本語で生活しているが，家庭において姉弟との関わりは手話を用いたものであった。丸田にとって手話は，自身のSODAというアイデンティティを象る大きな要素である。

しかし一方で，「手話はろう者の言語である」という認識が社会に広く浸透している。そのため，丸田も自身にとって手話がかけがえのないことばであると捉えると同時に，それが他者からは認められにくいものであると考えている。特に，ろう者学などの学問を見渡せば，手話こそがろう者のアイデンティティの基盤であるというような主張を多く見る。丸田も手話がろう者やろう文化にとって大きな意味をもつ言語であるという認識には納得している。ただ，このような認識があることを理解するほどに，SODAである自分にとっても手話が特別な言語であると他者に語ることができなくなる。それは，SODAが聴者であり，音声日本語話者としての側面の方が他者から強く見られるからである。手話と音声日本語に序列をつけることができないと考える丸田と，聴者であることから音声日本語優位だと安易に決めつける他者との間に，認識の乖離があると考えられる。

丸田が特に手話への親しみを実感したのが，アメリカでのとある経験である。以下の文章は，日本に帰国した直後に書き留めたもの（丸田，個人的記録，2018年11月ごろ）である。

アメリカに滞在している間のほとんどの時間を，私はギャローデット大学で過ごした。この大学の公用語はASL（アメリカ手話）であり，私は学内で，手話で話している人たちを多く目にしてきた。私はASL話者ではないため，必要な時は日本からの留学生に通訳をしてもらっていた。私から留学生への伝達は日本語対応手話である。

私はASLを初めて見たため，その内容は全く理解できなかった。しかし，皆が手話で話しているという環境を懐かしく感じ，安心感さえ覚えたのである。意思疎通が図れる音声英語の環境よりも，全く理解ができないASL環境の方が，自分の居場所があるような気がしていた。

丸田は，言語の環境に対して「居場所」「安心感」などを見いだしている。ここから，所属する集団とその集団のなかで使われている言語に密接な結びつきがあると捉えていることがわかる。手話やろう文化が自分に染み込んだものだと捉えていることから，丸田は「手話＝ろう者」「ろう文化＝ろう者」という等式に当てはまることなく，自身の言語経験と今の言語的アイデンティティを結びつけて考えていることがわかる。

3. 3. 相互インタビューにおけるそれぞれの語りから

本項では，3. 2. で記述したようなそれぞれのライフストーリーをもとに実施された相互インタビューにおける語りを抽出しながら，筆者らの経験と言語観を分析・記述する。特に，筆者らはそれぞれ異なる言語経験を有しながら，自身の韓国語あるいは手話について「ホンモノではない」という感覚を共通して抱いているということが明らかとなった。筆者らは相互インタビューのなかでこのことを「ホンモノ幻想」と呼び，その背景にある経験について対話を深めた。そこで，本項では筆者らの言語観について，特に「ホンモノ幻想」との関連を示しながら分析を行った。

3. 3. 1.「ホンモノ幻想」が言及された経緯

相互インタビューのなかで「ホンモノ」というキーワードが挙がったのは第1回インタビューにおける以下の対話部分である。

金：丸田さんはいっつも自分の手話を「汚い」とか「できない」って言うから，どこまでのレベルにいったりとか，誰かに「いや，できてるよ」って言われたら「自分できてるんだ」って思うんだろうっていう疑問。だから弟さんとのあれ（確執）が乗り越えられたらそうなるのか……でもそこは関係ないのかな。

丸田：ああ，なんか関係なさそう。なんかZさんとかにも，「いや，丸田さんの手話は変とかそんな謙遜するレベルじゃないよ」とかみたいなこと言われるけど。自分のなかでそのネイティブとかホンモノみたいな感覚はありそう。

金：それいつからなんですかね，ほんまに。そこがやっぱり気になりますけど。いつからそんなホンモノと……。

丸田が自身のなかで「ネイティブ」・「ホンモノ」という感覚があるという発言に対し，金も自然に受け入れ，理解を示している。その後対話はなぜ「ホンモノ」という感覚が生まれたのかという話題に移り，さらに次のような対話が続いた。

丸田：ワシの思うホンモノって，別に実体を伴ってるわけじゃないんよ。この人の手話，とかってわけじゃない。

金：わかりますよ。

丸田：それは，それこそ言説だと思うんよね。

金：そうだと思います。

丸田：っていうのがあるから，そこと比べたら永

遠にまあたどりつけないので。まあ聴こえる・聴こえないがあるから。まあ（その考え方が）研究（する過程）で生まれちゃった……まあまあ，そうっちゃそうか。

金：なんか，私は逆に，ずっとホンモノ幻想があって，今もなくはないですよ，ホンモノ幻想はあるし，永遠にたどりつかないラインがあるんだと思ってるけど。まあ比べてもしゃあないか，って腹をくくったんですよ，今はね。

筆者らにとっての「ホンモノ」とは，誰か特定の話者を想定しているわけではなかった。さらに，金・丸田両者ともにそうした「ホンモノ」は自身が「永遠にまあたどりつけない」（丸田），「永遠にたどりつかないライン」（金）とし，言語の上達によって解消されるわけではないという認識を共有している。そうした実体を伴わず，永遠にたどりつけないものであるという丸田の発言を受け，それを筆者ら自身が抱える幻想として金は「ホンモノ幻想」と発言している。

それでは，筆者らにとっての「ホンモノ」とは何なのか，また，そうした「ホンモノ幻想」はなぜ生まれたのか，金・丸田それぞれの場合にわけて考えたい。

3. 3. 2. 金と「ホンモノ幻想」

金にとって「ホンモノ幻想」が立ち現れるのは自身の韓国語に対してである。金は韓国語について，「私にとっての韓国語って，まあ話すための言語なんですけど，なんていうんかな，なんか人を，誰かを安心させ得る材料というか，人とつながるための言語なんだけど，人のための言語って感じ」がするとし，さらに，自身の思う「ホンモノ」については次のように語っている。

金：自分がホンモノじゃないなって思うときに，別に親と比較しているわけではないんですけど。なんか比較してるときのホンモノっていうものはどっか漠然としていて，それこそ実体がない感じはするんだけど。でも，突き詰めてみたら多分私が思うホンモノって，親とかおばあちゃんとかおじいちゃんとかから認められる韓国語，であって。うーん。で，認められる韓国語，指摘されない韓国語とか，韓国語らしい韓国語……うーん。ネイティブっぽい韓国語。っていう意味では，親を含む韓国人の韓国語なので，韓国で育った韓国人の韓国語って感じなので，その中に親もいるって感じかな。

金にとって「ホンモノ」の韓国語は両親や祖父母から認められる韓国語であり，さらに韓国語は「誰かを安心させ得る材料」，「人のための言語」だと話す。それは，幼少より周囲の人々から自身の韓国語を評価されることによって生まれたものであるといえる。

金：うーん，周りの人？大人もだし，親もそうだし，おばあちゃんもそうだし，まあ日本にいる友達とかもそうですし。「（韓国語を）できるんでしょ」（って言われて），「いやできません」（って答える）。で，（韓国語を）できない側に立つじゃないですか，日本だったら。で，親だったら，小さい頃は多分もっと（韓国語を）できたっていうのもありますけど，あの，まあ年相応で，それなりの会話ができて，まあいっかってなるのが，（成長につれ）それ以上伸びないわけで。で，「もうちょっと頑張らんとね」とかおばあちゃんとか親に言われると，「ああ（自分は韓国語が）できないな」って。

金は幼少より周囲から「韓国語を話せること」を求められてきたという。それは，家族からも，日本の友人からも同様であった。

金は「日本でも私が韓国人ですってなったら韓国語できるんだろうなって見られる」と話す。また，

金：（手話を）やってみて，とか（言われたこと）

は？

丸田：ない。

金：あ，ないんですか？！

（中略）

金：私，割と（日本語と）違う言語が自分の中にありますよって人は，それを引っ張り出されるんだと思ってました。

と話しており，名前から韓国人であることが容易に想起される金は韓国語を話せるものとして韓国語を「引っ張り出される」経験をしてきたことがわかる。日本では，韓国人である金に対し「（韓国語を）できるんでしょ」という期待からその表出を求められてきたのだといえる。しかし，

丸田：だって（自分は）元々ホンモノになれない人だから。なんか，言ってしまえばさ，（金さんは）なれる人じゃん。なれる人だった。

金：……なれる，って思われる人。なれないですよ（笑）なれないのはもう身に染みてわかるんですけど，でも周りはなれると思うんですよ。

と話している通り，金は周囲の期待に反し上手に韓国語を話すことはできなかった。

さらに，金は両親や祖母から発音を訂正されたり，表現について指摘を受けたりすることが多くあった。このような経験を重ねることによって，自身は韓国語が「できない」と自己評価するようになっている。「できない」経験を積み重ねることで，「できない」自分は「ホンモノ」ではないのだという考えが形成されている。また，繰り返される他者からの評価により，金は韓国語で話すことそのものを避けるようになり，祖父母から電話がかかってきても電話口に出なくて済むよう「逃げ回っていた」と語っている。

自身の言語に対して受ける評価は，子どもであった金にとって，その話者である自身への評価そのものにかかわる問題であったと考えられ，特に両親や祖父母といった自身にとって重要な他者からの評価が与える影響は大きいことが推察される。だからこそ，自身の韓国語の不十分さを露呈し失望させるくらいならば，両親・祖父母の前で言語を使用する場面そのものを避けようとしたと考えられる。金は以前は「ホンモノ」になりたいと思っていた，と振り返り，「ホンモノになれたら（親や祖父母に）喜んでもらえると思ったから」と発言している。また，

金：私は逆に小さい頃から，そういうの，ホンモノになれることを求められてきて，でもなれないって自分で思って，期待されて，失望されてきたから，ホンモノっていうものがあって，それにはなれないって思ってる。裏表なんですけど。

と語っており，金に向けられる周囲からの期待，そして失望という評価が「親とかおばあちゃんとかおじいちゃんとかから認められる韓国語」がホンモノであるという認識，そして「ホンモノ」にはなれないという自己評価につながったのであろう。

また，このような他者からの期待と評価の問題は，金の属性によるものであることが対話のなかで明らかとなった。金は自身の属性を他者に明かすことで，他者からの評価が変わった経験について語っている。

金：私は割と（自身の韓国語に対して）評価を受けてきたって考えた時に，でも私が何者かを知ることによってその評価ってころころ変わるなって感じがあって。

丸田：何者？

金：例えば大学生になって，初めて親抜きで韓国に行く，行きましたってなったときに，私が日本から来た，日本からの観光客だってなって韓国語をしゃべったら，すごい上手って言われるんですよ。で，「ああ，上手なんや」って思うわけですよ。そこで，「いやあ親が韓国人なんですよね，テヘ」みたいなことを言うと，ちょっと微妙な顔をされるんですよ。そ

れにしては，みたいな顔をされるわけですよ。

丸田：んー。

金：日本でも私が韓国人ですってなったら韓国語できるんだろうなって見られるし。私の属性によって期待値が変わって，で，それと現実の私との差で評価されるって感じがする。

この語りからは，他者から受ける評価にはその話者の属性が関与していることがわかる。日本では「韓国人」だから「韓国語できるんだろうな」とみられるほか，韓国では「日本からの観光客が話す韓国語」と「両親が韓国人の人が話す韓国語」に求められる基準が異なっているのだといえる。金は，この二つの基準の間での評価の変化を経験するなかで，「両親が韓国人の人が話す韓国語」への期待と同時に，自身の言語能力が不足しているという失望を受け，こうした場面でも自分は「ホンモノ」ではないという幻想を強くしたと考えられる。

一方で金は次のような経験もしている。

金：最近それこそ，韓国から旅行で来た人とご飯行ったりたまにするんですよ。そしたら，みんな，なんか，話したことと矛盾してるかもしれないけど……属性によって「できてねえじゃん」みたいな顔されるって話したけど，最近の若い人たちはそんなことなくて，「めっちゃできてるじゃん」って言ってくれるんですけど。で，「めっちゃ話せるじゃん」とか。「それはまあたまに発音がまあちょっと難しそうなときはあるけど，まあ伝わるからね」って言われるんですよ。で，それは私が（自分の韓国語がどうか）聞いたからそう言うけど，実際に話してるなかで発音を指摘されることはほとんどないし。だから，その「伝わればいいじゃん」っていうマインドが最近会った人たちはみんなあるなと思うんですけど。親は「伝わればいいじゃん」だけじゃない，やっぱ自分の子どもだから教えたい，とか。

「最近の若い人たち」は金の属性をみて何かを期待することはせず，韓国語をあくまでコミュニケーションツールとして捉え，言語の技術的側面よりも円滑なコミュニケーションが可能かどうかを重視されたという。そして，金の両親は，自分の子どもへの期待があるからこそ，「伝われば良い」という考えには留まらず，より高度な言語技術を求めたのだろうと振り返っている。

同時に，金は次のようにも語る。

金：「伝わってればいいじゃん」って言われたときに，私は今でこそ，そう言われたら「あ，よかった，伝わってるんだ，よかった，ありがとう」ってなるけど，私は多分ちょっと前だったら「伝わってればいいじゃん」を穿って，「でもやっぱホンモノらしくはないんじゃん」ってちょっと嫌だったと思う。

「伝わってればいいじゃん」と言われても，以前であれば「結局ホンモノではないよそ者と思っているからそう言ってくれるのだ」と考え，「ちょっと嫌だったと思う」とし，しかし現在はそれを好意的に受け止めることができるという。これは，金が自身の「ホンモノ幻想」に気づき向き合うなかで，自身の韓国語への受け止め方に変化が起こってきたためであろう。

このように現在では変化もみられるものの，金に「ホンモノ幻想」が生まれたきっかけとなったのは金の韓国語の技術的側面に対する期待と評価であった。

また，金は「ホンモノ」の言語話者は次のような人であるという考えを形成させている。

金：私にとって言語って，やっぱ属性とか，その地域の文化とか，そこの人になるっていうイメージなんですよね，多分。

丸田：社会に，って。

金：そう，社会の完璧な一員。ただ間借りしている一員じゃなくて。っていう意味合いがある

と思ってて。

さらに，

金：言語って言語だけじゃないじゃないですか。言語を母語的に習得したときに獲得するものって，単純な操る言語だけじゃないと思うんですよ。そこに付随する文化とか言葉の意味とか。

とも発言しており，金にとって「ホンモノ」の韓国語話者とは，現地・韓国で育ちながら，文化と共に言語を獲得していく人のことであり，先に記述したような「韓国で育った韓国人の韓国語」がホンモノであるという考えの形成に至っているといえる。

しかし，こうした「ホンモノ」という概念は誰か特定の話者を指すものではなく，あくまで自身の言語のみに対し「ホンモノ」かどうかという評価をしたり「ホンモノ」になりたいとそれを求める気持ちをもっており，他者に対して「ホンモノ」を求めることはない。それは，韓国人の両親が話す日本語に対しても同様である。

金：でも別に私はお母さんにホンモノは求めてない。だってお母さんのことばはお母さんのことばで，別に何も思ったことがないので。私はあんまりお母さんの発音とかことばの間違いとかを指摘しないタイプの子どもなので。「だって分かるし」で流しちゃうから。本人から聞かれたときは答えますけど。だから親により言葉をどうのこうのみたいなのは求めたことないと思うんですけど。でも「親がこの先何十年（日本に）また住んで，（そのときは日本人として）ホンモノになりますか？」って聞かれたら「ホンモノにはならない」って答える。でも別にそれを求めてないし，努力も……努力というか，別に目指してないと思うから，今のままでいいと思うけど。

このTSからもみられるように，金は両親の日本語に対しては「ホンモノ」かどうかについては意識せずに生活を送ってきた。一方，同様に言語を獲得してきた背景をもっているはずの自身の韓国語に対する意識は，「ホンモノ」ではないという観念に支配されてきた。金の「ホンモノ幻想」は，自分にだけ課される，強固なものであった。

3．3．3．丸田と「ホンモノ幻想」

丸田の場合，「ホンモノ幻想」が立ち現れるのは自身の手話に対してである。丸田は自身の手話について次のように語っている。

丸田：自分の手話やってるのを見返す，（これまで自分の研究で行ってきた）インタビューのときとかに（した手話），あの，ろうの人と話しているのを見返すと，なんか「ぽいな」と思うときもある。

金：ふうん。ぽいな？

丸田：なんか，ろうの人っぽい，ときもあるなって思うし。

また，自身の手話を「（ろうの人と話すとき）馴染む感じはする」とも話しており，自身に手話やろう文化が染み込んでいることを実感している。

一方で，自身の手話を「綺麗な手話じゃないし，ぐちゃぐちゃ」とも評するほか，「絶対になれないから，ホンモノには」と次のように語る。

丸田：絶対になれないから，ホンモノには。だからワシはワシ，みたいな感じ，むしろ。

金：あ，そっちで開き直るんだ，もう。

丸田：だって聴こえるし耳。自分は絶対ネイティブにはなれないし，ろうの人の手話とは違うし，ろうの人にはろうの人の文化とかもあるから。

金：それはホンモノがあるって思ったときからずっとそう？割とはじめから。

丸田：ああ……でも割とはじめからだと思う。割とはじめって，その，ホンモノみたいな，なんか自分の手話が下手って思い始めてからだ

と思う。

丸田にとって「ホンモノ」とは，ろう者の手話のことであり，先述したように自身に手話やろう文化が染み込んでいることを実感しながらも，そうした手話やろう文化を「ホンモノ」の人たちのものとして位置づけている。

これには，丸田の属性に対して社会から受ける「まなざし」が一つの背景として挙げられる。丸田は聴者であり，「聴者だから手話はできないのが「ふつう」なのに手話ができる」のである。「聴者なのに手話ができる」というまなざしは，「手話はろう者のもの」という幻想を形成する。これは，丸田が研究を通して出会った学問における規定についても同様であった。

丸田は，「自分の言語」が何かを問われると，「言語って言われちゃうと，日本語かなって思う」，「ことばって言われたら手話ももちろん入るんですけど，言語って言われるとちょっと何か言いにくい」と話し，その背景として「対応手話って言語じゃないって言われる」ことを挙げた。丸田が家庭内言語として主に使用してきたのは日本語対応手話であり，日本手話ではなかった。「大学生くらいまで日本手話と対応手話とか（その違いについて）知らんかった」と丸田が述べている背景には，丸田は自身が用いていることばに明確な区別をもっておらず，ことばを総体として捉えていたということがある。一方，社会からのまなざしは「言語」によって区切られるものであったことから，「自分の言語」という問いにはうまく答えられていない。このような，丸田自身のことばの捉えは，言語学が規定するような「言語」という区切りと相反するものであり，言語学との出会いによって意識化させられたものであるといえる。

また，丸田が研究に従事するようになると，学問上の規定では，まず丸田が家庭内言語として使用してきた日本語対応手話が言語として認められなかったほか，丸田は聴者でありろう者ではないために自身の手話を母語として認められなかった。そこで自身の「ことば」の内実と学問上の規定との間に葛藤が生まれ，丸田に「ホンモノ幻想」が生まれたといえる。

丸田に「ホンモノ幻想」が生まれたのは，研究に従事したことがきっかけであった。学問上の規定との出会いのほか，丸田は次のことを挙げている。

丸田：自分のなかでそのネイティブとかホンモノみたいな感覚はありそう。

金：それいつからなんですかね，ほんまに。そこがやっぱり気になりますけど。いつからそんなホンモノと……。だって，言ったら，もう私たちはこんな研究してる立場だからこんなこと言えますけど，自分にとっては（自分のことばが）ホンモノなわけですよ。

丸田：まあね。

金：でもそれをいつからニセモノだって思っちゃうんだろうって。

丸田：うーん……。でもけっこうあとな気がする。研究し始めてから，ろうの人と関わりがマスターから増えたから。そのあとな気もする。

金：あ，それまでは逆になかったんですか？

丸田：外で手話を使うことがなかったから。なんかホンモノとかニセモノとかなかった。

（中略）

金：ホンモノと比べて評価し始めるのは，ホンモノと（自分が）思う人たちに関わり始めてから？

丸田：うん，（それ）が強い気がする。

丸田は研究などをきっかけに家族以外のろう者と出会い，彼らを「ホンモノ」であると考えるようになっている。また，丸田は，

丸田：大学の手話サークルとかで，家族を離れて初めてろうの人に出会ったときに，個別のろう文化，ろう社会ってものに出会ったのかな

と思う。

金：ああ，なるほどね。なるほどなるほど。じゃあそこの家族っていう円をのけたときに，家族は自分がその中にいるじゃないですか。

丸田：うん。

金：でも，そこをのけたろう文化に出会うと，自分のまあその（それぞれの文化に）入ってるような入ってないような，入ってない感じが出てくるってことなんですか。

丸田：そう。だからすごい単純に言うと，姉とか弟のことをろう者って別に思ってない。弟だし，姉だから。結局ろうとか聴こえるっていう線引き以前に，家族っていうくくりのなかで一緒なんよね。

と語っており，家庭内で複言語・複文化に生きているなかでは丸田に「ホンモノ幻想」は存在していなかったことがわかる。家庭内言語である手話は「丸田家手話」であると丸田は繰り返し表現し，「姉と弟はむしろ，（丸田からみて）丸田家手話のなかで生きてるから，ホンモノとかじゃなくて，ワシはその一員なんよ」と語った。丸田にとって，家族であり同じ「丸田家手話」に生きる姉と弟と自分は並列する関係であり，そこに「ホンモノ」，「ニセモノ」という概念はなかった。そこには，家庭内で自身の手話を評価される場面がなかったことも一因として挙げられる。

金：（手話で交流する）相手が変わったら（自分の手話は）変わります……？

丸田：うーん。なんかうちの家の中の手話って本当に手話なんかよう分からん状態だったから，うーん。なんか変わった気がする。なんかその，それこそ評価というか，の目が入るやん，外でするのって。とか，家族じゃないろうの人とするから。だから意識的な物がなにか違う気がする。

金：ああ……でもそこでは私は割と一定かもしれない。なんていうんですか，一定のある程度のラインがあって，うまいへたがあるというか。

丸田：そこの評価の基準みたいなんが家の中にうちはなかったから。で，（金さんは評価の基準が）家の中にあったわけじゃん，家のなかで強かったわけじゃん。なんかそこの違いもある気がする。

家庭内ではあくまで同じ「丸田家手話」に生きる家族同士の会話ツールとして手話が存在しており，そこには聴こえる・聴こえないということは関係がなかった。しかし，家庭の外で手話を使用する機会が増えると，「聴者なのに」手話を使用する丸田に対する社会からの評価のまなざしが存在するのだといえよう。

丸田にとって，自身が「聴者」という属性を有しており，あくまで「ろう者」にはなりえないという問題は大きな意味を有している。

金：でも自分の英語に関しては，自分の英語はホンモノじゃないとか思わないでしょ。

丸田：ああ～，ホンモノだとは思わないけど，ホンモノニセモノ基準で多分。

金：考えないでしょ。

丸田：考えないですね。

金：なんで手話はそう考えるんですか？

丸田：わあ，たしかに。なんでだろう。でもやっぱりなれないからじゃないかな。

金：なれないから？

丸田：なんか英語は……。

金：なれるの？

丸田：本気で勉強して海外でずっと生活したらなれるとまだ思ってるんだと思う。そこの絶望をまだ味わってないもん。

金：ああ，なるほど。そういうこと。ああ，なるほどね。

丸田に「ホンモノ幻想」が立ち現れるのはあくま

で自身の手話に対してのみである。それは，丸田にとっての「ホンモノ」とは概念としてのネイティブサイナーであり，聴者である自身は「永遠にまあたどりつけない」という「絶望」を生まれながらにして突き付けられ続けてきたからだといえるだろう。

また，丸田は「ホンモノ幻想」は「あくまで自分の手話の話だけよ」と話す。「ほかの（人の）言語に対して，それは母語じゃないからホンモノじゃない，とかはもちろん思わない」が，「（自分の）手話だけ」には「思っちゃう」とし，他者の言語には寛容な姿勢を示しながらも，自身の手話には属性と学問から生じる「ホンモノ幻想」がつきまとうのだとした。

3. 4. インタビュー調査からみえる筆者らの課題とその背景

日本社会のなかで複言語・複文化に生きる筆者らは，そうした経験をどのように位置づけ，そこにどのような課題をもち，また，その背景は何だったのだろうか。

筆者らはそれぞれ，日本社会におけるマジョリティでありながらマイノリティでもある狭間の存在である。金は韓国人でありながら，日本で育つことで日本語母語話者である。日本語母語話者であることは，日本社会においてマジョリティであることを意味する。一方，金は韓国人であるために「韓国人ならば韓国語ができるだろう」という社会からのまなざしにもさらされる。「韓国人なのに韓国語ができない」ことが金の受ける評価である。また，丸田は，聴者であり，音声日本語母語話者である。音声日本語母語話者であることは，日本社会においてマジョリティであることを意味する。一方，丸田は手話話者であるというマイノリティでもある。聴者が手話をできることは特異なことであり，「聴者なのに手話ができる」ことが丸田の受ける評価である。

こうした評価は，それぞれ筆者らの「属性」を一面的にみとることで生じるものである。金は「韓国人」，丸田は「聴者」という属性から，それぞれ「韓国語ができるはず」，「手話はできないはず」というまなざしを受ける。それに相反する筆者らは，それぞれのマイノリティ言語（韓国語・手話）を自身の言語として位置づけることができないという課題を生じることとなった。このように自身の言語を認めることができなくなったのは，複数言語話者であることそのものが問題なのではなく，周囲や社会から受けるまなざしによるものであった。

金の場合は，「韓国人」という属性に対して受ける周囲からの「期待」と，あわせて失望という「評価」を受けることで，自身の韓国語の言語技術に自信を失っていく。「韓国人」として備えるべき韓国語の技術が不足しているために，自身の韓国語はあるべき韓国語，つまり「ホンモノ」ではないという自己否定に至ることとなる。

丸田の場合は，「聴者」という属性，そして「手話はろう者のもの」という社会通念があるために，「聴者なのに手話ができる」自分を肯定的に位置づけることができない。手話ができるために「聴者」らしくもなりきれず，一方手話ができても「聴者」であるがために「ホンモノ」の手話話者にもなりきれない。二つの言語の狭間で葛藤することになった。

こうした経験を繰り返すことで，筆者らはそれぞれ「ホンモノ」が存在し，自身は「ホンモノ」ではないのだという「ホンモノ幻想」を強固に形成することになる。自身に向けられるまなざしを何度も経験することで生まれるこの幻想は，あくまでそれを向けられてきた自身の言語に対してのみ形成され，それに葛藤してきた筆者らは反対に他者の言語への寛容な姿勢をもつこととなった。「ホンモノ幻想」は，自身の言語を自分のことばとして認めることができないという否定的な課題と，他者の言語への寛容な姿勢という肯定的な側面を筆者らにもたらすもので

あった。

4. 考察

4. 1.「ホンモノ幻想」が形成される背景

3. で複数の言語話者として生きてきた筆者らのナラティブを分析した結果，筆者らには「ホンモノ幻想」が強固に形成されていることが明らかとなった。

その背景としては，以下の2点が挙げられる。

4. 1. 1. 家庭内の言語の技術的側面に対する評価

金の場合，自身の韓国語能力を他者に評価され続け，「できない」という評価を自分自身に下し続けることで，「できない自分はホンモノの韓国語話者ではない」という幻想を形成するに至っている。それは，家庭内でむしろ強固に形成され，金は「親の期待に応えたい」，「ホンモノの韓国語話者になりたい」と思う反面，そうはなれない自分に苦しむこととなった。

このような幻想は，ネイティブを基準に据え，自身の韓国語の能力が欠如しているという認識によるものである。ネイティブである両親や祖母からネイティブらしい韓国語を求められ，自分自身でもネイティブスピーカーの韓国語と自身の韓国語を比較することによって気づかされてしまった欠如であるということもできる。

これは，日本社会と同様に韓国社会がモノリンガリズムに支配されていることの反映と考えられる。Shin et al.（2015）は韓国において「単一言語主義」が現在でも依然支配的であると述べ，「単一言語主義は公用語を使用するネイティブスピーカーの“ネイティブらしさ”を理想化させる（筆者訳）」と指摘する（p. 152）。金の祖父母・両親はこうした韓国社会のモノリンガリズムを内面化しており，金の韓国語に対して技術的評価をし，ネイティブらしい韓国語を求めることとなった。金自身，こうした言語観を内在化した家庭からの技術的評価の視線を受け続けたことで同様のモノリンガリズムを深く内面化しており，また，同じくモノリンガリズムが支配する日本で育ったことで，モノリンガリズムをさらに強化している側面があると考えられる。そうして自分自身にも内在するモノリンガリズムにより，自身の韓国語をネイティブと比較したり否定したりするようになったのだといえる。「ホンモノ幻想」が生まれるのは周囲と自分自身に根付くモノリンガリズムが一つの要因であるといえるだろう。

一方，丸田の場合は，「評価の基準みたいなんが家の中にうちはなかった」と話しており，家庭内で他者から評価を受けるという経験はしていない。その結果，丸田は家庭内では「ホンモノ」といったことを考えることはなく，姉弟以外のろう者と家庭外で出会うまで「ホンモノ幻想」を形成することもなかった。「姉と弟はむしろ丸田家手話のなかで生きてるから，ホンモノとかじゃなくて，ワシはその一員」という語りは，丸田家のなかで手話言語の技術に基づく価値づけや優劣はなく，「丸田家手話」を扱うという共同体に所属する一員として家族が互いを認識していることを表している。

このような，手話言語と音声日本語環境という複言語環境だったことに加えて，丸田の家庭では「丸田家手話」という言語の枠組みを超えたことばが使われていた。これは，トランスランゲージングの言語思想に通ずる考え方である。

トランスランゲージングとは「マルチリンガルがもつ全ての言語資源を，言語の境界線を超越してひとつのつながったレパートリーとしてとらえた概念」（加納，2016，p. 3）である。また，義永（2021，p. 145）はトランスランゲージングと言語イデオロギーの関係について以下のように述べる。

多言語話者がもつ言語資源を言語の境界線を

超越した一つのつながったレパートリーの総体と捉えるトランスランゲージングの考え方はモノリンガルを前提とする近代的な言語イデオロギーからみればある種の対抗的なイデオロギーであるといえる。

つまり，丸田の家庭における言語環境は日本社会に浸透するモノリンガリズムとは異なる言語観が根底にある複言語環境であったため，家庭内で使用されていた手話，音声日本語，「丸田家手話」が有機的に結びついて用いられていたということである。この環境には，言語としての区別は持ち込まれておらず，一続きの「ことば」が存在していたといえる。この言語環境においては，丸田に対する手話の技術的側面に基づく評価が行われず，そのことがさらにモノリンガリズムとは異なる言語観が根底にある複言語環境を保証することになったといえる。

筆者らのナラティブやその考察からわかることは，モノリンガリズムが強い言語社会においては，言語の技術的側面に対する評価が「ホンモノ幻想」を強化するのであり，「ホンモノ幻想」が強化されることのないよう，技術的側面に固執しないコミュニケーション重視の言語への捉え方が必要となる。

例えば，今回の対話から筆者らには「ホンモノ幻想」という一種の言語思想があることが明らかになったが，筆者らはこの「ホンモノ幻想」を乗り越えようとする最中にある。筆者らは言語教育を専門に研究を進めており，自身のアイデンティティと言語の関係について幾度も自省を繰り返している。そして，筆者らは本研究のなかでさらに対話と自省を繰り返し行った。次のTSは，第4回インタビューにおいて，3. 3. 2. で先述したように金が最近の韓国からの旅行客との会話では韓国語を「めっちゃ話せるじゃん」と言われる，と述べたことを受けて続いた対話の様子である。

丸田：それはねえ，ワシもそうよ。ワシもろうの人に「手話苦手なんですよね」とか「日本手話あんま得意じゃない，できない」とか言ったときに「いや伝わるからいいじゃん」とか，「日本語しゃべる人も全員がNHKのアナウンサーみたいなしゃべり方してたら嫌でしょ」みたいな。いや，そこなんよね。ホンモノ幻想って，そこにコミュニケーションの問題はある意味では入ってないと思う。伝わってるかどうかでホンモノかどうかじゃなくて，ほんとに標準語的な目指される一番美しいものに到達するかどうかの差だから。

（中略）

金：「伝わってればいいじゃん」って言われたときに，私は今でこそ，そう言われたら「あ，よかった，伝わってるんだ，よかった，ありがとう」ってなるけど，私は多分ちょっと前だったら「伝わってればいいじゃん」を穿って，「でもやっぱホンモノらしくはないんじゃん」ってちょっと嫌だったと思う。そういうのは……（丸田さんは）別に，それこそろうの人に「いや，伝わってるからいいじゃん」というふうに言われたときは何も思わないんですか？

丸田：ああ……。まあちょっと穿ると思う。

金：ちょっとね。

丸田：ちょっと穿ると思う。

金：ちょっとひねくれた感じ。

丸田：なんか，借り物感はぬぐえない。

金：結局私がホンモノじゃないからそう言ってくれるんだって思っちゃう。なんて言うん。

丸田：うん。それも分かる。

金：よそ者だから。

丸田：だんだんなんかその意識なくなってきたなと思う。

金：うん，そうそうそう。

丸田：それはだからやっぱホンモノ幻想からの脱……脱却っていう。

このように，筆者らは自身の「ホンモノ幻想」を自覚し向き合うなかで，「ホンモノ」がありそれには到達できないという「幻想」ではなく，「伝わっていれば良い」という「現実」のコミュニケーションを重視するように変化している。そして，言語が他者や社会から規定されるものではなく，言語やことばを自身の必要とするコミュニケーションのための手段として捉え直した結果，自身のアイデンティティの基盤として重要な言語であったと再帰的に捉えるようになっていると考えられる。

このように「ホンモノ幻想」に対抗するためには，言語を技術的側面で評価するのではなく，他者とつながるコミュニケーションのための手段として捉える考え方がまずは必要だと考えられる。

4．1．2．言語の属性に対する社会からのまなざし

「ホンモノ幻想」のもう一つの背景として，言語の属性に対する社会からのまなざしがある。

4．1．1．で示したように，金の「ホンモノ幻想」は家庭内で受ける評価に端を発したものであった。一方，家庭外で受けていた評価は，「韓国人なのに韓国語能力が不足している」というものであった。まず，金は「韓国人＝韓国語」，つまり「韓国人ならば韓国語ができるはずだ」というまなざしを受ける。金は，こうしたまなざしに日本社会からも韓国社会からもさらされることになった。日本社会においては「韓国人」であるがために「（韓国語が）できるんでしょ」という期待をもたれ，韓国社会においては「ネイティブらしい韓国語」を期待されてきた。そうして期待される「韓国人らしい韓国語能力」に金が及んでいないために，否定的な評価を受けることになる。このことは，金の「ホンモノ幻想」をより強固にするものであった。

また，丸田は4．1．1．で述べたように家庭内ではトランスランゲージングに基づくようなことばの捉え方をもつことができているにもかかわらず，「ホンモノ幻想」を形成している。その背景にあるのがこの社会からのまなざしである。社会には「手話＝ろう者」という通説的な観念が存在しており，丸田は聴者であり，ろう者ではないことから，これには当てはまらない。その言語の話者の属性を規定する社会通念によって，丸田は自身の言語的アイデンティティを否定されるという経験を重ねることになった。社会からのまなざしにさらされるという経験の蓄積は，丸田の属性と言語のつながりを壊し，「手話はろう者の言語であって聴者である自身の手話は間借りのものである」という「ホンモノ幻想」を形成することになった。丸田が抱える「ホンモノ幻想」が形成されるに至った経緯は金のような言語の技術的側面やそれに対する評価に起因するものではなく，言語と自身の属性の不均衡によるものであるといえる。

このように，筆者らはそれぞれ「韓国人」，あるいは「聴者」という一面的な属性に着目されることで，それぞれ「韓国語ができるはず」，「手話はできないはず」というまなざしを受け，そうした社会からのまなざしと実際の自身とのギャップを生じることとなった。このような社会のまなざしは，「韓国人＝韓国語」，「ろう者＝手話」というモノリンガリズムに固定された言語観からなるものである。

オーリ（2016，pp. 65-66）は，多文化共生の実践において「○○国」を紹介する活動の表象行為を取り上げ，「「○○国」は「○○」である，「○○人」だから「○○」であるのような単純様式を超越し，個人としての「わたし」に注目をすることで，より公平な多文化共生が実現可能になると考えられる」と指摘する。この指摘を踏まえると，筆者らの「ホンモノ幻想」を象る「韓国人＝韓国語」，「ろう者＝手話」という単純様式を乗り越え，丸田の家庭内で見られたように，言語としての枠組みを超えた総体として，その個人のことばを捉え直す必要があるといえる。

4. 2.〈見えないマイノリティ〉と「ホンモノ幻想」

それでは，4. 1. で示したような背景からなる「ホンモノ幻想」に対して，どのような言語教育の形が求められるのだろうか。「韓国語＝韓国人」，「ろう者＝手話」といった社会通念や「ネイティブらしい」言語技術を求める捉え方には，本研究で示したような課題が生じる可能性があることは先に指摘した。さらに，この捉え方の転換をもたらす言語教育の在り方を考える必要がある。そのための示唆となりうるのが，〈見えないマイノリティ〉という概念である。

〈見えないマイノリティ〉とは「一見するとそのマイノリティ性が他者からは理解されにくい／見えない／見えにくいために，マジョリティとして認識されているマイノリティ」（丸田，2019，p. 2）のことである。

日本社会における複数言語話者の場合，音声日本語話者というマジョリティ的側面が強調され，他言語話者としての側面は見過ごされてしまう。つまり，その社会においてマジョリティとされている個人の属性が代表化され，その属性の一面だけが周囲から認知されるということである。本研究においては，金は韓国人，丸田は聴者という属性がそれぞれ代表化され，韓国人でありながら韓国語より日本語を得意とするという側面や，聴者でありながら手話話者であるという，属性と話者としての特性が相反する状況が問題化された。

このように，〈見えないマイノリティ〉という概念を持ち出すことによって，人々をマイノリティ／マジョリティという二分法で捉えるのではなく，個の多面的な側面を捉えることができ，「韓国人」，「聴者」のような一つの属性しか見ていない現在の社会通念に転換をもたらすことが可能になると考える。この社会通念の転換は，複数言語話者の「ホンモノ幻想」に代表されるような，自身の音声日本語話者ではない側面へのネガティブな感情を取り除き，肯定的に捉え直すための足掛かりとなる。

また，〈見えないマイノリティ〉はそのマイノリティ性が他者から理解されにくい／見えない／見えにくいと同時に，当事者自身もそのマイノリティ性を他者に見せない／見せにくい。それは，「日本語を話すことができる」というマジョリティ的側面によって日常では隠されている他の言語背景を表出することで起こるであろう他者からの評価やまなざしを恐れる「ホンモノ幻想」が存在するためである。日本社会の言語状況を踏まえると，複数言語話者の豊かな言語資源であるはずの言語背景が，「日本語を話すことができる」というマジョリティ的側面によって隠され，他者への表出を妨げるという負のものに転位してしまう可能性を指摘できる。筆者らの語りに見られた「韓国語を話すことをためらう」，「手話話者であるSODAとしての自分を隠す」という経験は，筆者らの「ホンモノ幻想」から生じたものであるが，同時に〈見えないマイノリティ〉であることから，社会や他者からその困難の実情が認知されず，支援や教育の対象となってこなかったといえる。難波（2022）はこのような〈見えないマイノリティ〉である学習者の存在を「狭間の学習者」として取り上げ，これまで研究・実践の対象となってこなかったと指摘している。

吉村（2022）が示しているような，複言語・複文化主義に基づく言語的・文化的アイデンティティを考えるためには，本研究で示したような複数言語話者が〈見えないマイノリティ〉にされてしまうという負の側面についても研究を重ねていく必要がある。こうした複数言語話者が〈見えないマイノリティ〉となってしまうのは，複言語環境にあることが問題なのではなく，社会からの評価やまなざしを受けることで自身の言語を表出できず，不可視な存在になってしまうことが問題である。言語教育の文脈から考えれば，ただ技術的側面に着目して言語を教授するだけでなく，様々な言語が有機的に結びついて

学習者の「ことば」が作られ，これが言語的アイデンティティの基盤になるということを踏まえることが求められる。コミュニケーション重視の言語教育を実践するには，こうした社会との関わりにおけるそれぞれの学習者の立場を重視することが必要である。

このように，〈見えないマイノリティ〉という視座は，「ホンモノ幻想」にみられるような複数言語話者の困難を可視化するとともに，「ホンモノ幻想」の背景にある，ある一つの属性から言語を規定する社会通念ではなく，複数言語話者として個人を捉えられるよう転換をもたらすものであり，言語教育においても，一人の学習者を，一つの言語の話者／学習者としてみるだけではなく，他言語話者でもある側面をもった人間としてみていくことを求めるものなのである。

5. 成果と課題

5. 1. 成果

ここまで，複数言語話者として生きることを背景にして「ホンモノ幻想」が形成され，この要因として言語の技術的側面への評価や属性に対する社会のまなざしが存在することを示した。また，複数言語話者を〈見えないマイノリティ〉という視座から捉え直すことを通して，複数言語話者が自身の複数言語を肯定的に捉えにくいこと，そして複数言語話者としての側面を表出しにくく，他者からも理解されにくいことの背景にある事柄を考察することができた。さらに，そうした複数言語話者の存在がその課題が見えにくいことによって研究／実践の視野の外に置かれてきたという課題を明らかにすることができた。

これまで，複数言語話者であるということは，バイリンガル教育の推進が示すように，豊かな言語的リソースを有する存在として肯定的に捉えられてきた。一方で，本研究が示したように，日本社会においては複数言語話者であることによって意識させられる他者からの評価や社会通念が引き金となり，葛藤や困難を生み出してしまう可能性がある。

この問題を日本社会に起因するものとして解釈できることに加えて，難波（2022）が指摘するように，〈見えないマイノリティ〉という存在が教育実践や言語研究，言語教育研究といった研究・実践においても等閑に付せられている現実がある。例えば継承語教育において，継承語を教授することを進めることは，学習者の継承語を保証するという側面においては意義あるものとして認められる。一方で，太田（2021，p. 89）は，「継承語が話せないことを「欠けている」状態と見なす社会の視線」が存在し，「継承語教育を行う際は，このような子どもたちの継承語を本来備わっているべき言語として捉えない視点が重要になってくる」といい，継承語教育が「○○人＝○○語」という社会通念を強化させてしまわないよう留意する必要があるだろう。このような指摘は，言語教育研究・実践において，複数言語話者に対するまなざしが一面的であることを問題化するものであり，〈見えないマイノリティ〉概念を視座にすることで可視化される学習者の多面性を言語教育研究・実践に含みこむことで乗り越えることが可能になると考える。

このように，本研究の成果は，従来の言語教育実践や研究における学習者像の捉え直しも求めるものであり，言語やことばの多様性を社会的・教育的に保証するための切り口になると筆者らは考える。

5. 2. 課題

一方，本研究には2点の課題が残る。1点目は，本研究では〈見えないマイノリティ〉として2名を取り上げたが，この研究で示されたアイデンティティ

形成の課題や日本社会との関係性についての拡張可能性について十分に検討することが出来なかったことである。本研究で取り上げたほかにも，言語的に〈見えないマイノリティ〉であることから，その困難の実情が他者から理解されにくい存在があることが想定される。

このような〈見えないマイノリティ〉をめぐる課題や「ホンモノ幻想」を形成する社会通念は，日本社会の課題として位置づけられる。個人のことばに対して寛容に理解を示し，他者を受け入れるという態度をもつことが達成されなければ，本研究で示した課題の根本的な解決にはつながらない。今後の課題としては，〈見えないマイノリティ〉と考えられるほかの当事者に対しても，同様に本研究の成果が活かされるのか検討を重ねつつ，その当事者とともに生きる周囲の人々への社会実践も考えていく必要がある。

2点目は，本研究の成果を日本社会や学問領域にどのように適用していくかということである。言語教育の課題として〈見えないマイノリティ〉の存在が視野の外に置かれてきたことについては先に述べた通りであるが，〈見えないマイノリティ〉の存在を踏まえた言語教育実践や研究を行った際に，どのような具体が表れるのかについて，本研究で示すことができなかった。現状の課題を克服するためには，複数言語話者の言語的側面に着目した本研究の成果を，社会や教育，研究の実の場へと還元していく必要がある。

これについての一つの展望としては，学校教育への適用の可能性が挙げられる。学校教育では，学習者の多様性が実践に活かされにくく，特にその言語的アイデンティティの多様性が反映されていないという実情が国語教育研究の立場から指摘されている（丸田, 2023）。本研究における学習者のアイデンティティ形成の過程が記された成果を活かし，学習者の多様性を現場で見取ることができれば，それぞれの当事者が求めるニーズや教育的支援の方途を探り，より実践を蓄積していくことができると考える。

今後は，研究の射程を拡張しつつ，本研究の成果を言語教育に関わる実践・研究の双方に資する具体を探求していきたい。

文献

イ・ヨンスク（1996）.『「国語」という思想――近代日本の言語認識』岩波書店.

欧州評議会（2004）.『外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠』（吉島茂，大橋理枝，訳）朝日出版社.（原典. *Common European framework of reference for languages*, 2001）

太田真実（2021）. 中国語使用に対する意識の変容過程と継承語教育のあり方――幼少期に中国から来日した若者のライフストーリーをもとに『ジャーナル「移動する子どもたち」――ことばの教育を創発する』12, 74-91. http://hdl.handle.net/2065/00082449

小熊英二（1995）.『単一民族神話の起源――〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社.

加納なおみ（2016）. トランス・ランゲージングを考える――多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のために『母語・継承語・バイリンガル研究（MHB）研究』12, 1-22. https://hdl.handle.net/11094/62212

神谷志織（2021）.『外国にルーツをもつ日本語を母語とする人々が語るストーリーの研究――子どもの教育を考える手がかりとして』［修士学位論文］広島大学.

熊谷晋一郎（2020）.『当事者研究――等身大の〈わたし〉の発見と回復』岩波書店.

熊谷晋一郎，國分功一郎（2017）. 来るべき当事者研

究――当事者研究の未来と中動態の世界，熊谷晋一郎（編）『みんなの当事者研究』（pp. 12-34）金剛出版.

牲川波都季（2012）.『戦後日本語教育学とナショナリズム――「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』くろしお出版.

中井好男（2015）. 失敗の捉え直しから生じる日本語教師の成長の可能性――中堅日本語教師とのナラティブ・インクワイアリーを通して『待兼山論叢――日本学篇』49, 17-35. https://hdl.handle.net/11094/61347

難波博孝（2022）. 国語教育思想論に関する研究の成果と展望. 全国大学国語教育学会（編）『国語科教育研究の成果と展望　Ⅲ』（pp. 43-50）渓水社.

二宮祐子（2010）. 教育実践へのナラティヴ・アプローチ――クランディニンらの「ナラティヴ探究」を手がかりとして『学校教育学研究論集』22, 37-52. http://hdl.handle.net/2309/107549

丸田健太郎（2019）.〈見えないマイノリティ〉の存在と自己形成の課題『国語教育思想研究』19, 1-8. http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048529

丸田健太郎（2023）. 国語教育研究／実践の対象としての〈学習者の母語〉概念の確立の必要性『日本教科教育学会誌』45(4), 37-47. https://doi.org/10.18993/jcrdajp.45.4_37

義永美央子（2021）. 第二言語の使用・学習・教育とイデオロギー――モノリンガルバイアス，母語話者主義，新自由主義. 尾辻恵美，熊谷由理，佐藤慎司（編）『ともに生きるために――ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からみることばの教育』（pp. 135-164）春風社.

吉村雅仁（2022）. 複言語主義と多言語主義. 日本国際理解教育学会（編）『現代国際理解教育事典』（改訂新版, p. 51）明石書店.

オーリ リチャ（2016）.「○○国」を紹介するという表象行為――そこにある「常識」を問う『言語文化教育研究』14, 55-67. https://doi.org/10.14960/gbkkg.14.55

Shin, D., Kim, K., Park, S., & Park, S. (2015). 국내 단일언어주의 정책 변화의 필요성 탐색――링구아 프랑카, 트랜스링구얼 논점을 기반으로『다문화와 평화』9(3) 143-162.（A study on the monolingual language policies in Korea: Exploring alternative thinkings in lingua franca and translingual practice）http://doi.org/10.22446/mnpisk.2015.9.3.007

http://alce.jp/journal/ vol. 22 (2024) pp. 190 - 210 ISSN : 2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

Article

The "genuine article illusion" of multilingual speakers:

Consideration through the narratives of authors

KIM, Jiyoo (KAMIYA, Shiori)*
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University, Japan

MARUTA, Kentaro
Hiroshima University Elementary School, Japan

Abstract

This study examines whether it is possible to formulate a view of language by plurilingualism and pluriculturalism in Japanese society through analysis and discussion of the authors' narratives. The authors grew up in a multilingual and multicultural environment and had difficulties living as multilingual speakers in Japan, where monolingualism prevails. This study aims to clarify the difficulty of living as a multilingual speaker in Japanese society. The authors were found to harbor a "genuine article illusion" about some language among our own, believing that they are not "genuine article" speakers of their language. This was based on two factors: the evaluation for the language skills, and the social gaze on the attributes of the language. This study revealed that such a "genuine article illusion" makes the authors, who are multilingual speakers, an Invisible Minority. Language education practices and the learner profile need to be rethought to overcome the "genuine article illusion."

Keywords: Invisible Minority, plurilingualism and pluriculturalism, social gaze, language skills, language education

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

* *E-mail:* jyskmy12@gmail.com